

なぜ防災や復興に女性の視点が必要なのでしょう。

岩手県の被災地の現場で、支援活動を続けている平賀さんにお話をうかがいました。

私たちのミッションに「性別にかかわらず一人ひとりの個性と能力が十分に発揮でき、安全で安心な暮らしが保障される心豊かな地域社会の実現に寄与すること」があります。

私たちは大震災発生後すぐに活動を開始。

2週間を過ぎたころから、内閣府を経由した支援物資や全国の女性たちからの支援金などが集まり始めました。そこで、ガソリンは不足し道路状況も不安な中でしたが、被災地に届ける方法を模索しはじめました。現地は避難所や地域によって状況が異なること、被災者の半数は避難所ではなく個人的に避難し、その人たちには物資が届きにくいことなどがわかりました。とにかく現地に物資を届け始め、

この活動に「デリバリーケアプロジェクト」と命名。岩手日報などを通じて宣伝しました。

最初は下着類が、また、支援物資の衣類は普通サイズが主なので、L、LL、XLなど大きい衣類の要望が多くありました。担当の男性には大きいサイズがと

は言い出しにくく、女性なら話しやすいとのこと。他に、ナプキンはあるが生理用の下着がない、尿漏れパット、高齢者におかゆや軟らかい食べ物などの声も。お風呂に入れるようになると、肌がガサガサなのでと、化粧水、乳液、ハンドクリームなど基礎化粧品に対する要望が殺到しました。4月に入り、仕事に戻りたい女性たちから、ブラジャーがなくて困っている、

せめて口紅だけでもなど、次第にメイクアップ用品の要求が出てくるようになりました。自分らしさを取り戻すためには大事なことと捉え、できるだけ買いそろえて届けました。避難所で活動をしている看護師さんを通して、障がいを持っている人や自閉症の子どもへの品などの要望も届きました。仮設住宅や家を借りた人からは、布団、ベッド、電気

このデリバリーケアは、8月末まで300回ぐらいいは行いました。

次に、さまざまな心の悩みを抱えている人たちに出会ったこと、また、阪神・淡路大震災の時の経験などから、女性に対する暴力が増えることを予測し、相談事業として東日本大震災「女性の心のケアホットライン・いわて」を開設。

その後は、仮設住宅の人たちの買い物代行や、高齢者の安否確認などを担う「被災地女性自立のためのデリバリーケアプロジェクト」を立ち上げました。被災した女性の雇用と経済的自立をめざし、買い物代行手数料1回100円、10人の雇用を創出しました。

平賀さんによると、もりおか女性センターではこれまで、阪神・淡路大震災を体験した女性たちの本を参考に学習会を実施、今回の支援活動には、そこで学んだことが役に立っているそうです。また、混乱の中では男女共同参画の視点が失われ「男だ女だと言ってる場合ではない」と、とたんに社会は保守化することのこと。平賀さんのお話から、女性の立場からの多くの問題点や、今後の課題に気づくことができました。

(安達)

避難所の運営に女性の視点

阪神・淡路大震災や東日本大震災などでは、女性の視点からいくつもの問題点が浮かびあがってきました。

普段日常生活の中でさほど気にもとめていないことも、避難場所では、大きな負担となります。

ある避難所では、男性のリーダーが多く、女性は朝5時に起きて、100人分の食事を毎日作っていたそうです。

避難所では、食事の用意や片付け、物資の配布、共有スペースやトイレの掃除、ゴミだし、行政との連絡、またイベントの企画や開催など、多くの仕事があります。

これらは、男女の性別に関係なく、個人の能力や才能、特技を活かした作業を共同ですることが大切ではないでしょうか。

女性も、避難所の運営に積極的に参画し、誰もが少しでも安心して過ごせる場所にしていくことが必要です。

(伊藤)

少しでも安心して過ごせる避難所とは

たとえば・・・

- 男女別の更衣スペースの確保
- 女性用の洗濯物干場の確保
- 高齢者やひとり暮らしの女性、障がい者や乳幼児のいる家庭など被災者の状況に応じた間仕切りの配慮など
- 授乳スペースや育児スペースの確保
- 女性や子どもの安心・安全に配慮した仮設トイレの設置場所や通路の確保
- 女性や子どもへの暴力や性的いやがらせの防止、心身の健康を守るなど女性や子どものための相談窓口の設置

